

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◇◆◇ No.0686 ◇◆◇

22/05/11

【 5 月ドル/円、果たして「3 ヶ月連続の大相場」となるのか注目 】

2 年ぶりとなる月間変動幅 10 円超を記録した今年 3 月に続き、4 月相場も同 9.58 円と 2 ヶ月連続の大相場となった。単発ではなく、今回に匹敵する 2 ヶ月連続の大相場となると、2016 年 6-7 月(11.83 円と 7.50 円)以来で、かなりのレアケース。

さらに遡って調べてみても、「3 ヶ月連続大相場」は 1998 年から 1999 年にかけて観測されたぐらい。実現すれば、23 年ぶりの快挙になる。果たして足もとの 5 月相場はどう動くのか、いつも通り経験則を参考に考えてみた。

◎「ドル高方向に大相場」なら、1ドル=140 円接近だが...

本題に入る前に、すでに終了している今年の 4 月相場はある意味、「特殊な相場」だったと言えるかもしれない。何故なら、4 月 6 日付の当レターで報じたように、4 月相場の大きな特徴として「3 月と逆方向に動くことが非常に多い」ことが知られており、その確率は 2000 年以降の 22 例中 19 例が 3 月と逆方向に動いている。その確率は実に 86%にも及ぶ。

しかし、今年はというと 3 月相場がドル高・円安に動いただけでなく、続く 4 月も同方向。ドル高・円安へと動いている。今年は、過去のセオリーがあまり通用しない一年なのかもしれない。

ともあれ、過去の経験則のひとつである 1990 年以降の星取表からまずみていくと、1990 年以降 32 年間の 5 月相場は 17 勝 15 敗。わずかにドル高が有利ではあるものの、互角に近く、特徴とは言えないようだ。しかし、いまだ少し突っ込んで調べてみると、5 月相場は「年間を通して、かなり荒れ模様の展開を辿ることが少なくない」という傾向がうかがえる。とくに近年その傾向が強く、実際に幾つか例を上げると、2004 年と 2006 年、2013 年、そして 2019 年はいずれも年間 3 位の月間変動幅。また、2015 年は同 2 位となっているほか、2010 年は実に年間 1 位の変動を記録していた。

つまり、それからすると、「3 ヶ月連続の大相場」を思わず期待せずにはいられないが、前段で指摘しているように、1998-1999 年以来、20 年以上も「3 ヶ月連続の大相場」は観測されていない。いったいどちらの見通しが正しいのだろうか。

もちろん、一市場参加者として「動いてくれた方が嬉しい」ことは確かなのだが、仮にドル高方向、ドルが続伸し今月も大相場をたどるとなると「1 ドル=140 円」という世界も見えてくる。「それはさすがに…」と、導き出す予想にすら思わず及び腰になってしまうのは、筆者が単に小心者であるということだけではないだろう。

一方、過去の事象、ニュースなどを振り返った場合、5 月は国際的な重要な出来事が多発しているが、そのなかでもとくに注目に値するのはロシアはともより、北朝鮮情勢に関する要因だろうか。

うち、後者でいえば、2018 年は「北朝鮮による、いわゆる『瀬取り』行為が公式に初めて確認される」、「トランプ米大統領が直前になり米朝首脳会談の破談通告(紆余曲折を経て、結局予定どおり 6 月 12 日に実施)」などが 5 月の出来事だったし、翌 2019 年は 5 月 4 日にその年初初めての「飛翔体」を発射。以降 9 月 10 日までの約 4 ヶ月間で 10 回、少なくとも 20 発以上の短距離弾道ミサイルが打ち上げられることになるキッカケとなっていた。

そうしたなか、今年もロシアの影に隠れがちだが、とくにここ最近では北朝鮮絡みで注目すべきニュースが幾つも伝えられている。そのひとつは、相次ぐ弾道ミサイルの発射だが、さらに「核実験の強行」にも注意が必要かもしれない。

実際、7 日付けの韓国聯合ニュースは、「韓国国家情報院の朴智元院長が、北朝鮮は 10 日の尹次期大統領の就任式と、20 日以降に予定されるバイデン米大統領の訪韓のあいだに核実験を行う可能性があるとの見解を示した」と報じていた。やはり「核の使用」をチラつかせた恫喝発言の多いロシア情勢には当然要注意だが、個人的には北朝鮮情勢、とくに「核実験の強行」にはさらに注意すべきというイメージを抱いている。(了)

